様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００４４７

研究課題名（和文）近代英国における女の〈終活〉研究

研究課題名（英文）Women's Art of Dying in Modern England

研究代表者
齊藤　美和（Miwa, Saito）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：９０３２４９６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代英国において人々が日常生活のなかで実際にどのような姿勢で死と対峙したかを明らかにするために、個別具体的で生活に密着した資料を研究の対象とするという立場に基づき、特に当時の女性が日々、どのように死と向き合い備えたかを探るべく、彼女たちが死をとりわけ強く意識したであろう人生の二つのステージ、すなわち＜出産＞と＜夫との死別＞ に焦点を合わせ、妊婦や寡婦が残した助言書や遺言、祈りや瞑想の記録、回顧録等を中心に調査し、加えて出産に関わるメタファーに着目することにより、女性特有の〈終活〉のあり方を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
わが国で〈終活〉という言葉が聞かれるようになって久しいが、どれほど「自分らしさ」を 謳おうとも、行儀よく人生を「始末」するためのこうした活動は、死の規格化・制度化を助長するばかりで、生者にとっての死の意味を改めて 問い直すことはない。本研究は近代初期に立ち戻り、死のシステム化が確立する以前の西洋社会において、特に女性が各ライフ・ステージでどのように死に備えたかを明らかにすることで、現代社会の〈終活〉のあり方に一石を投じるとともに、日常生活のなかで残された資料を調査の中心に据えたこと、またメタファー分析を取り入れたことにより、従来の研究とは異なるアプローチから、近代往生術を研究することができた。

研究成果の概要（英文）：In early modern Europe, ‘ars moriendi,’ or the art of dying was, as Philippe Aries states, “replaced by an art of living.” The study aimed to research how people in seventeenth-century England had prepared for death in their daily lives, especially focusing on women in pregnancy or in bereavement. Childbirth and the death of a spouse would provide good, if painful, occasions for a woman to meditate on her own death. While a pregnant woman, realizing the danger of death in childbirth, left wills or advice books for her unborn child, a widow faced her own death in the process of mourning over the death of her husband. Literary metaphors of conception, pregnancy, and childbirth were also analyzed in terms of the ‘ars moriendi’ for women in particular.

研究分野：英文学

キーワード：終活　近代英国　女性　寡婦　妊婦　出産

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、齊藤（研究代表者）がこれまで二〇年以上に渡って行ってきた近代英国における死をめぐる言説や女性の伝記についての研究の延長線上にある。著書 *Political Lamentation: The Funeral Elegy in Early Modern England, 1603-1660*(2002、単著)や『記憶の薄暮―十七世紀英国と伝記』(2018 年、単著)、さらには、過去の科学研究費補助金による研究「キリスト教世界における子どもの殉教研究」(平成２２～２４年度)「近代英国における女性の〈偉人伝〉研究」(平成 25～27 年度）等が、本研究課題の着想に至るきっかけとなり、以下(1)～(3)を学術的および社会的背景として、研究に着手することとなった。

(1)　わが国で〈終活〉という言葉が聞かれるようになって久しい。遺族のために財産を整理し、葬儀や墓の算段をする。どれほど「自分らしさ」を謳おうとも、行儀よく人生を「始末」するためのこうした活動は、死の規格化・制度化を助長するばかりで、生者にとっての死の意味を改めて問い直すことはない。

(2)　〈終活〉をめぐるこのような社会的背景に鑑みたとき、死のシステム化が確立する以前の近代初期に立ち戻り、西洋において人々が実生活の中でどのように死と向き合い、死に備えたかを探る研究の重要性を認識するに至った。

(3)　近代初期の往生術や死生観についての研究は、これまで数多くなされているが、当時の人々が日常生活のなかで実際に日々、どのように死に備えたのか、個々のケースが具体的に調査されることは少なく、特に女性に的を絞った研究については、十分になされてきたとは言い難い状況であった。

２．研究の目的

これまでの近代の往生術に関わる研究の対象は、よき生き方（＝よき死）を説く信仰生活のための手引書が中心であったが、実際に人々が日常生活のなかでどのような姿勢で死と向き合ったかを理解するには、より個別具体的で生活に密着した資料を調査することが求められる。
このような立場から、本研究では特に当時の女性が日々、どのように死と向き合い備えたかを探るべく、女たちが死をとりわけ強く意識したであろう人生の二つのステージ、すなわち＜出産＞と＜家族との死別＞ に焦点を合わせ、彼女たちの残した遺言や瞑想禄、回顧録を中心に調査することで、女性特有の〈終活〉のあり方を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究の方法としては、まずは連合王国で近代初期の出版物や手稿等の資料収集と調査を行い、その調査・研究の結果を踏まえ、女性の二つのライフ・ステージ、すなわち妊娠・出産と夫との死別に焦点を合わせ、①夫を失った寡婦の死との向き合い方　②妊娠・出産に際しての妊婦の死との向き合い方について、それぞれ論考をまとめることで、研究を進めることとした。
研究方法として特に重視したのは、現地での調査と、多角的なアプローチ、すなわち、文学、宗教学、社会学、医学など、当時の〈終活〉をめぐる言説を様々な角度から分析することであった。具体的には、以下(1)~(4)のような方法を採った。

(1)　近代女性の実生活のなかでの死への備え方を考察するために、広範な領域にわたる文献を調査・収集した。特に子孫への遺言や助言書、瞑想禄、備忘録（commonplace books）など、女性が死に直面した際に残した文献については、出版された第一次文献だけではなく手稿をも調査対象とし、サバティカル研修期間（2019 年 4 月～9 月）の一部を利用して、2019 年 6 月 10 日から 9 月 2 日まで海外研修を実施、連合王国の研究機関図書館、主として Oxford 大学 Bodleian Libraries と British Library（London）を中心に、本研究には欠くことのできない第一次文献の調査・収集を行った。これにより、17 世紀～18 世紀を中心に英国女性の〈終活〉のあり方について、研究の礎となる第一次文献を広く収集すると共に、個別の事例を調査した。現地調査という方法をとることにより、母の遺言が一族に代々受け継がれ、いわば「相続」されている事例や、寡婦が夫を弔う行為そのものが、自身の死に備える〈終活〉でもあったことを示す文献にあたることができたことは、本研究にとって大きな意義があった。

(2)　近代女性の死生観一般について、当時の風潮・志向を探るために、作法書などの第一文献や近代ヨーロッパを対象とする当時の死生観に関する第二次文献を、国内外の研究機関や図書館等で調査した。

(3)　当時の葬儀や出産・産後に関わる儀式、産婆術などにも着目し、宗教的視点のみではなく、社会学的、医学的な視点も考察に取り入れ、研究を行った。

(4)　死の捉え方・備え方を、当時の文献に見られるメタファーを分析することで探るという、文学的手法を取り入れた。

４．研究成果

(1)　「近代英国における寡婦の終活についての研究」

研究成果(1)の研究目的は、助言書としての観点から、女性の残した遺言や助言書、瞑想禄等について分析を進めることであった。寡婦による瞑想禄は、彼女たち自身の遺言を兼ねているケースが見られ、加えて子どもたちに助言を残すという意図もあって書かれたものであり、研究課題を実施するうえで調査対象とすべき適切な第一次資料であった。こうした文献を中心に分析した結果、寡婦たちが夫の亡骸を見守りながら死の予行演習に勤しみ、ときに夢で夫と交信して自らの死期を探り、子らに人生の助言という精神的遺産を譲渡する手はずを整え、遺言を作成するさまを探り、女性が日常生活のなかで具体的にどのように〈終活〉を行ったのか、その実践法を明らかにすることができた。(1)の具体的な成果は、以下①～③である。

①夫に先立たれた妻が日々の生活のなかでどのように死に備えたのか、その終活のあり方を考察するにあたり、近代に盛んに出版された女性のための作法書を調査し、そこで唱えられている寡婦としての務め―すなわち、夫を弔うこと、亡き夫と共にあること、夫の記憶を胸に生きること―が、そのまま寡婦たちが己の死に備え、よき死を迎えるための往生術でもあったことを明らかにした。

②作法書で示された理想の寡婦像に対し、当時の寡婦たちが実際に「死の稽古」をどのように行っていたのか、個別のケースを考察するために、寡婦たち自身が書き残した手記、特にグレイス・マイルドメイ（Grace Mildmay）とキャサリン・オースティン（Katherine Austen）の瞑想禄（meditations）を中心に調査し、寡婦による終活の実践法を明らかにすることができた。

③上記①および②の研究成果は、2020 年 12 月 20 日（日）に開催された日本英文学会関西支部第 15 回大会（オンライン開催：開催校近畿大学）で招待発表「近代初期における寡婦の終活」を行い、公表した。さらに、本発表原稿は、加筆・修正のうえ、共著『十七世紀英文学における病と癒し』（2022 年 9 月刊行予定）に同論文タイトルで出版することになっている。（2022 年 1 月受理）。

(2)　「近代英国における妊娠・出産のメタファーと妊婦の終活についての研究」

研究成果(2)の研究目的は、研究初年度に渡英して主要図書館で実施した手稿および出版物の調査に基づき、当時の女性の妊娠・出産時における死との向き合い方と、メタファーとしての出産と死との関わりについて、研究を進めることであった。メタファーから考察するという観点は、当初研究計画に含まれていなかったが、妊娠・出産のメタファーに着目することによって、一見死とは対極にあると思われる命を宿す受胎が、当時なぜ好んで死の譬えとして用いられたのかを追究することとなり、それによって、聖書を源泉とする宗教的背景や当時の出産をめぐる産婆術などの医学的背景など、より広い視野に立って研究を進めることが可能になった。(2)の具体的な成果は、以下①～⑤である。

①十七世紀の文人であり説教師であったジョン・ダン（John Donne）の 2 つの著作『危篤時の祈り』*Devotions upon Emergent Occasions*(1624)と『周年追悼詩』*Anniversaries*(1612)に見られる妊娠・出産のメタファーについて考察した。ダンが危篤状態に陥った際、その体験を綴り回復後に出版された *Devotions* と、15 歳足らずで死去した少女エリザベス・ドルアリ（Elizabeth Drury）の死を悼んで書いた追悼詩集 *Anniversaries* にみられる妊娠・出産のメタファーを分析・考察することにより、病と出産が当時、等しく身体と精神双方の危機にある状態と捉えられていたことを明らかにした。

②William Perkins, *A salve for a Sicke Man*(1595) といった病床における信仰の手引き書等を調査し、床にある状態として出産が一般に病と区別なく扱われ、当時の社会において出産を控えた妊婦に死に備えることが広く一般的に促されていたことを明らかにした。

③当時の妊婦の死への備え方を、妊婦のための祈祷書や、近年“Mother's Legacy”と称されるところの母親が子に残した助言書のなかに探るとともに、個別のケースを考察するために、17 世紀に自らの出産経験を記録したアリス・ソーントン（Alice Thornton）による回顧録などを調査することで、当時の妊婦による〈終活〉のあり方を明らかにすることができた。

④当時の出産をめぐる医学的背景を産婆書などを手掛かりに分析し、産婆がお産のみならず遺体を清める役割も果たしていたことなど、妊婦の〈終活〉について、当時の医療と関連させて考察した。

⑤出産と〈終活〉との関わりをキリスト教社会における儀式という観点から探るために、出産後、床上げをした女性が教会で神に感謝の祈りを捧げる礼拝、すなわち churching service で行われる出産感謝説教（churching sermon）を分析し、床上げが死後の復活と重ねられているケースなど、儀式の場において、出産がどのようにメメント・モリと結びつけられていたかについて、考察した。

⑥上記①～⑤の研究成果は、2021 年 9 月 19 日にオンラインで開催された 17 世紀英文学会全国大会において口頭発表「出産と信仰の修辞学―John Donne, *Anniversaries* と産褥マニュアル―」を行い、公表した。さらに本発表原稿に加筆・修正を施し、『欧米言語文化学研究』第 9 号(2021 年 12 月発刊)に論考「病床の「世界」と出産のメタファー―ジョン・ダンの周年追悼詩」をめぐって―」を寄稿し、研究成果を論文として公表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 齊藤美和	４．巻 9
２．論文標題 病床の「世界」と出産のメタファー－ジョン・ダンの『周年追悼詩』をめぐって－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『欧米言語文化学研究』	６．最初と最後の頁 107－123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 齊藤美和
２．発表標題 近代初期における寡婦の終活
３．学会等名 日本英文学会関西支部大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 齊藤美和
２．発表標題 出産と信仰の修辞学－John Donne, Anniversariesと産褥マニュアル－
３．学会等名 17世紀英文学会全国大会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 齊藤美和他	４．発行年 2022年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 未定
３．書名 十七世紀英文学における病と癒し	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関